

助成事業実施報告書

団体名..... HINO飛ぶ教室
 代表者・役職名 氏名..... 滝口 仁・代表

▼報告書の扱い、および記入にあたっての注意点

この報告書(精算報告書以外)は、ホームページなどで公開する予定ですので、広く読まれることを想定してご記入ください。また、編集段階で、表記・表現等を事務局で編集する場合がありますので、あらかじめご了承ください。語尾の表現は「です・ます」調をお願いします。報告書に掲載するため活動の内容がよくわかる写真(2枚程度。写真の肖像権問題がないものの提出をお願い致します)を添付して下さい。

1. 助成プロジェクト名

社会的マイノリティーの子ども・若者に対する様々な支援

2. 実施団体の概要(創設の経緯、創設時期=法人で、法人化前に任意団体での活動がある場合、その段階からご記入ください。会員数など。180文字程度まで)

1980年に八王子市にて TAKAO「飛ぶ教室」(地域の補習塾)として発足。入塾テストをせず、「誰でもが入れる教室」にしたため、学習に遅れのある子や不登校の子ども、「ひきこもり」の若者が徐々に増え、1997年日野市移転と共に「HINO飛ぶ教室」に名称変更しインクルージョンに基づくフリースクールに。近年では発達障害のメンバーが増加傾向にあり、2012年に発達障害当事者会を設立、2019年には東京都発達障害当事者会ネットを設立し、滝口が代表理事に就任。

3. プロジェクトの目的とその背景(※応募申請書に記載のものでも可) 250文字程度まで

理念的には「ソーシャル・インクルージョン」であり「誰も排除されない社会」を目指す。社会におけるマイノリティーは多様である。不登校・ひきこもり・様々な障害を持つもの・LGBT・生活困窮家庭・多文化家庭など様々であり、なんらかの生きづらさを抱えている人は決して少なくはない。「マイノリティーが生きやすい社会は、誰もが生きやすい社会」と考えています。

4. プロジェクトの内容(※当初予定と変更がない場合は、応募申請書に記載のものでも可) 300文字程度まで

1. 学習支援(原則無料)
2. 様々な社会体験
3. コミュニケーションのワークショップの実施
4. 発達障害当事者会の運営
5. フードバンク等を利用した生活支援

5. プロジェクトの実施で得られた「結果」(OUTPUT。実施回数や参加者数など)、「成果」(OUTCOME。事業によって生じた直接的な変化)、「社会的な変化」(IMPACT。事業が社会に与えた影響)などの『効果』 300文字程度まで

原則無料の学習支援は週二回実施(希望する高校に入学することができた。発達障害当事者会は月一回実施。(参加者の孤立、自尊心の低下を防ぐ効果はあった。)コミュニケーションのワークショップは月一回実施(一定の効果はあったと考えられる。)

合宿・旅行は年間2~3回実施。(生活の様々な場面を共有することによりソーシャルスキルの向上と参加者相互の親睦がはかられた。)

6. プロジェクト実施にあたっての課題、今後の展望など 300文字まで

無料の学習支援については広報の工夫が必要。また日野市当局や社会福祉協議会との一層の連携が必要。卒業生が大学生になり、後輩のサポートをしてくれる状況が生まれつつある。

7. 参考資料

支援対象プロジェクトで作成したチラシ、パンフレットやマスコミで紹介された記事等は現物またはコピー、活動状況の写真などを参考資料として提供してください。

○参考資料あり・特になし

「空き家の福祉活用事例」

HINO 飛ぶ教室

所在地；東京・日野市 運営者；HINO 飛ぶ教室代
 利用建物；木造 2 階建ての 1 階 建築面積；約 50㎡ 開設；2017 年

【空き家活用の経緯】

HINO 飛ぶ教室の始まりは 1980 年。八王子市高尾で始めた補習塾で障害児、不登校の子、授業から落ちこぼれる子などさまざまな子どもたちと出会い、誰にも開かれ、誰もが排除されないインクルージョンに基づく場として設立された。そこで 18 年間、知的障害や発達障害、不登校、引きこもり、ひとり親家庭など地域のさまざまな子ども、若者、成人まで誰もが安心して通える学習・体験の場、居場所としての活動を続けてきた。やがて都内各地から通う利用が増えるようになり、高尾から都心により近い日野市のマンションへ移転。その後同じ日野市の京王線高幡不動駅前のパチンコ店の 2 階を、オーナーの好意で 5 年間、家賃無料で借りられることになって移転した。

約束の 5 年がたち新たな空き家、空き室探しが始まる。日野市の空き家活用の窓口、不動産屋、ネットなどから情報を集めたが、日野市は丘陵地帯に住宅が広がり、空き家もそうした山坂のきついアクセスに不便なところが多いため、都心のほうから来る利用者には負担が大きい。また、滝口さんは、飛ぶ教室のほかにも、東京・多摩「大人の発達障害」当事者会、子どもも大人も食堂、コミュニケーションに悩む人を対象にした「会話のワークショップ」、アフタースクールカフェなど幅広く活動をしており、飛ぶ教室はそうした活動の事務局としても機能し、相談などで訪ねてくる人も多いため、駅からのアクセスが良いことを重視して場所を探すも難航する。そのなかでたまたま知り合いの不動産屋に紹介されたのが、JR 日野駅から市役所

へ向かう坂道を上った住宅街の空き家だった。

オーナーがかつて住んでいた隣に家を新築して移ったので空いた木造 2 階建ての住宅の 1 階を家賃 3 万円円で借りることができた。2 階はオーナーが物置として使っている。ダイニングキッチンを事務所スペースに、6 畳と 8 畳の和室を学習と居場所にあてている。そのままの間取りで使えるため改修費はゼロ。その前のパチンコ店 2 階は無味乾燥なオフィスという感じだったのに比べ、こちらはオーナーの家族が住んでいた和風の生活感のある住まいで、利用者は庭に面した畳の部屋でごろごろしたりして、アットホームな感じできつろげると好評という。

【活動の内容】

飛ぶ教室の会員は小学生から上は 40 歳までと幅広い。そのうちここに通ってくる利用者は今は 10 名前後と減ってきている。ほかの会員は当事者会、ワークショップ、アフタースクールカフェなどで活動しているようだ。通う利用者が減っているのは、18 歳までを対象とした学習支援が制度化され、法定では利用者の負担は 1 割で、飛ぶ教室に通っていた 18 歳以下の子がそちらに流れているためとみられる。一方で 19 歳以上の人への支援制度は、就労支援だけしかない。支援は就労がゴールではないという。発達障害の人はコミュニケーションがうまくいかず就職しても長続きしないことが多い。飛ぶ教室の成人会員にはそうした人が少なくない。家庭と職場だけでないサードプレイスというべき居場所が必要になっている。



駅前のパチンコ店の 2 階から高台の住宅街の民家へ移転



アットホームな環境で利用者は思い思いに過ごす